

辭納言藤大卿、左九條の宅有り。地は貳町に餘り、屋は則ち五間なり。東は施藥慈院に隣り、西は眞言の仁祠に近し。生休歸眞の原、南に迫り、衣食出内の坊、北に居す。涌泉水鏡のごとくにして表裏なり。流水汎溢して左右なり。松竹風來つて琴箏のごとし。梅柳雨催して錦繡のごとし。春の鳥啁聲あり、鴻鴈于き飛ぶ。熱渴臨めば即ち除き、清涼憩へば即ち至る。兌には白虎の大道あり、離には朱雀の小澤あり。緇素逍遙する、何ぞ必ずしも山林のみならん。車馬往還すること朝夕に相續く。

貧道物を濟ふに意有つて、竊に三教の院を置かんことを庶幾ふ。一言響を吐けば千金即ち應ず。永く券契を捨てて遠く冒地を期す。給孤の金を敷くことを勞せずして、忽に勝軍の林泉を得たり。本願忽に感じて、名を樹てて綜藝種智院と曰ふ。試に式を造つて記して曰く。

若し夫れ、九流六藝は代を濟ふの舟梁、十藏五明は人を利するの惟れ寶なり。故に能く三世の如來、兼學して大覺を成じ、十方の賢聖、綜通して遍知を證す。未だ有らじ、一味美膳を作し、片音妙曲を調ぶる者は。身を立つるの要、國を治むるの道、生死を伊陀に斷じ、涅槃を蜜多に證すること、此を棄てて誰ぞ。是を以て前來の聖帝賢臣、寺を建て院を置き、之を仰いで道を弘む。然りと雖も毘訶の方袍は偏に佛經を翫び、槐序の茂廉は空しく外書に耽る。三教の策、五明の簡の若きに至つては、壅がり泥んで通ぜず。肆に綜藝種智院を建てて、普く三教を藏めて諸の能者を招く。冀ふ所は三曜炳著にして昏夜を迷衢に照らし、五乘鑣を並べて群庶を覺苑に駢らん。

或ひと難じて曰く、「然れども猶事先覺に漏れて、終に未だ其の美を見ず。何となれば備僕射の二教、石納言の芸亭、此の如き等の院、並びに皆始有つて終無く、人去つて跡穢れたり」と。

答ふ、「物の興廢は必ず人に由る。人の昇沈は定めて道に在り、大海は衆流に資つて以て深きことを致し、蘇迷は衆山に越えて以て高きことを成す。大廈は群材の支持する所、元首は股肱の扶け保つ所なり。然れば則ち類多き者は竭き難く、偶寡き者は傾き易し、自然の理然らしむ。今願ふ所は一人恩を降し三公力を勦せて、諸氏の英貴、諸宗の大徳、我と志を同じうせば百世繼ぐことを成さん」と。

難者の曰く、「善し」なり。

或いは人有つて難じて曰く、「國家廣く庠序を開きて諸藝を勧め勵ます。霹靂の下には蚊響何の益かあらん」と。

答ふ、「大唐の城には、坊坊に閭塾を置いて普く童稚を教へ、縣縣に鄉學を開いて廣く青衿を導く。是の故に才子城に滿ち、藝士國に盈てり。今是の華城には但一つの大學のみ有つて閭塾有ること無し。是の故に貧賤の子弟、津を問ふに所無く、遠坊の好事、往還するに疲多し。今此の一院を建てて普く瞳矇を濟はん。亦善からざらん哉」。

難者の曰く、「若し能く果して此の如くならば美を盡し善を盡せり。兩曜と與んじて明を争ひ、二儀と將んじて久しきを競はん。國を益するの勝計、人を利するの寶州なり」。

餘不敏なりと雖も一簣を九仞に投げ、涓塵を八埒に添へて、四恩の廣徳を報じ、三點の良因と爲さん。

師を招く章

『語』に曰く、「里は仁を美と爲す。擇んで仁に處らざんば焉んぞ智を得ん」。又曰く、「六藝に遊ぶ」と。『經』に云く、「初の阿闍梨は衆藝を兼ね綜ぶ」と。『論』に曰く、「菩薩は菩提を成ぜんが爲に、先づ五明の處に於て法を求む」と。是の故に善財童子は百十の城を巡つて五十の師を尋ね、常啼菩薩は常に一市に哭して、切に深法を求む。然れば則ち智を得ることは仁者の處に在り、覺を成ずることは五明の法に資する。法を求むることは必ず衆師の中に於てし、道を學ぶことは當に衣食の資に在るべし。四つの者備つて、而して後に功有り。是の故に斯の四縁を設て群生を利濟す。處有り法有りと云ふと雖も、若し師無くんば解を得るに由無し。故に先づ師を請ず。師に二種有り。一には道、二には俗。道は佛經を傳ふる所以、俗は外書を弘むる所以なり。眞俗離れずといふは我が師の雅言なり。

### 一つ道人傳受の事

右、顯密二教は僧の意樂なり。兼て外書に通ぜんとならば住俗の士に任すべし。意に内の經論を學ばんと樂ふ者有らば、法師、心四量四攝に住して、勞倦を辭せざれ。貴賤を看ること莫くして、宜しきに隨つて指授せよ。

一つ俗の博士教受の事

右、九經九流、三玄三史、七略七代、若しは文、若しは筆等の書の中に、若しは音、若しは訓、或いは句讀、或いは通義、一部一帙、瞳矇を發くに堪へたらん者は住すべし。若し道人、意(こころ)に外典を樂はん者は、茂士孝廉、宜しきに隨つて傳授せよ。若し青衿黄口の文書を志し學ぶ有らば、絳帳先生、心慈悲に住し、思忠孝を存して、貴賤を論ぜず貧富を看ず、宜しきに隨つて提擲し、人を誨へて倦まざれ。三界は吾がなりといふは大覺の師、四海は兄弟なりといふは將聖の美談なり。仰がずんばある可からず。

一つ師資糧食の事

夫れ人は懸瓠に非ずといふは孔丘の格言なり。皆食に依つて住すといふは釋尊の所談なり。然れば則ち其の道を弘めんと欲はば必ず其の人に飯すべし。若しは道、若しは俗、或いは師、或いは資、學道に心有らん者には、並びに皆須く給すべし。然りと雖も道人素より清貧を事として、未だ資費を辨ぜず。且く若干の物を入る。若し國を益し人を利するに意有り、迷を出で覺を證することを志求せん者は、同じく涓塵を捨てて此の願を相濟へ。生生世世に同じく佛乘に駕して共に群生を利せん。

天長五年十二月十五日

大僧都空海記す